郁達夫「她是一個弱女子」における女学生同士の「恋愛」

李　　天　琪

はじめに

郁達夫の創作活動をトータルに考える際には、一般に1927年を分岐点として、前期（或いは初期）と後期に区分している[1)]。筆者は郁達夫の後期の文学活動に関心があり、その一環として、前稿で、1930年で郁達夫の左翼作家連盟からの離脱の経緯について考察した[2)]。郁達夫の左連離脱後の創作に関する考察は前稿で残った課題である。後期創作の考察に向けては、本稿で取り上げる小説「她是一個弱女子」（以下「弱女子」を略称）は非常に重要である。「弱女子」は郁達夫が1932年に発表した中編小説で、郁達夫後期創作の特徴を体現する最初の作品に位置づけられるのではないか。「弱女子」の創作特徴は主に二点ある。一つは現実に生じている社会的問題（1927年「上海クーデター」[3)]や1932年「一・二八事変」[4)]など）を正面から取り上げ、それをストーリーの重要な構成部分とする点である。二つ目は小説の題材の広がりである。特に、男性作家がテーマとして扱うことが極めて少ない女性同性愛関係について、「弱女子」は正面から描き、物語の基軸に据えているのである。

濱田麻矢は『少女中国――書かれた女学生と書く女学生の百年』[5)]において、1930年代前後での女学生同士の親密な関係は凌叔華、丁玲、張愛玲などの女性作家によって書かれてきたが、男性作家にとっては忌避と軽蔑の対象でしかなかったようだと指摘している。この指摘を踏まえつつ、男性作家が女学生同士の同性愛的な恋愛を描くことに対して、「弱女子」からはまさに新たな考察が提起できると筆者は考えている。

「弱女子」は出版された直後に発禁処分とされ、1980年代になってはじめて郁達夫の文集に収録された[6)]。小説の前半は鄭秀岳、馮世芬、李文卿この三人の女学生同士の恋愛を中心に、後半は主に学校から離れた鄭秀岳の恋愛結婚を中心に描写されている[7)]。本稿の第一章では女学生である鄭秀岳、馮世芬、李文卿の間における「恋愛物語」の展開を具体的に分析しつつ、その特徴を明らかにする。第二章では卒業後の鄭秀岳と馮世芬の絆を中心に論じる。「弱女子」における女学生の「恋愛」の描写から、後期創作の特徴を見出すことが目的である。

一、女学校の「恋愛物語」とその中にある男性のかげ

本章では小説の前半における女学校の「恋愛物語」を中心に論じる。この「恋愛物語」は、①鄭秀岳と馮世芬の親密さ（精神的擬似恋愛）、②鄭秀岳と李文卿の性的関係を持つ恋愛、③女性主人公たちの男性との恋愛の三つを指している。

1、鄭秀岳と馮世芬の二人の空間

小説の冒頭で、鄭秀岳は、外見は美しく、そして期末試験の成績も学年で第一位であるため、学校内では学生のみならず、教師たちからも注目されていることが詳しく描写されている。馮世芬も容姿は綺麗で、期末の成績も鄭秀岳と僅かの差の第二位であった。馮世芬は第二学期から鄭秀岳と教室で隣席になったが、第二学期開始後の十数日間は二人が親しくはなかった。ある日の午後、送迎の人力車が来なくて、鄭秀岳が困っている時、馮世芬は彼女に声をかけ、自分用の送迎人力車を使って鄭を家まで送ってあげた。この人力車の出来事を契機に、二人の友情は開花した。

第三節の冒頭には、「秋が深まり、鄭秀岳と馮世芬の友情も、果樹園の果実と坂の枯れ草のように、季節にともなって成熟した黄金時代を迎えた[8)]」と記されているように、二人の友情は「黄金時代」に至った。具体的な表現としては、例えば、授業、食事、自習の時、二人は必ず一緒にいる、寝る時も散歩の時も、一刻も離れたくないとの思いに駆られる。土曜日の夜は、鄭秀岳が馮家に行かなければ、馮世芬が鄭家に行って夜を過ごす。土曜日になっても、二人は家に帰りたくないと考えたことが何度もあった。また、二人は寮のベッドを並べて、昼にはカーテンを降ろし、夜になると、カーテンを外して、お互いのベッドを自由に行き来するようにまでなっていく。

鄭秀岳と馮世芬は非常に親密であったが、「二人が一緒にいる時は、教室でもベッドの上でも、人がいるかいないかを問わず、ただ互いに顔を見て、手を繋ぎ、触るのみである。別の行為は確かに思っても思い到ることはできなかった[9)]。」鄭秀岳と馮世芬はクラスメイトの間の「秘密ニュース」はよく聞いたことがあったが、二人はこれが女学生の性的行為を指すこととは理解できない。ここでは、鄭秀岳と馮世芬の親密さは性的関係と関係なく、二人には性行為への欲望は存在していなかったことがはっきりと表現されている。

だが、鄭秀岳の変化を示す、彼女が初めての月経を迎える描写がある。この後、鄭秀岳と馮世芬の間に変化が生じていく。鄭秀岳は体が成長するとともに、物欲も大きくなる。この時、より世間のことを知っている馮は鄭に説教した。二人は金銭に対する態度がかなり違う。例えば、李文卿の贈り物（腕時計）に対して、馮世芬は全く無関心だが、鄭秀岳は逆に夜にこっそり腕時計を左腕につけてそのまま寝た。翌朝、馮世芬はまだ寝ている鄭の腕に腕時計を見つけ、「極めて悲しい」と感じながらも鄭に多くの説教を行う。説教の後で、馮世芬は泣き、鄭秀岳も泣いた。この腕時計の件を通じて、鄭秀岳と馮世芬の間には、李文卿と叔父の陳応環という二人の介在的な人物の存在が明らかになる。

その後、馮世芬は上海に陳応環を出迎えるために、四日間鄭秀岳のそばを離れる。馮は火曜日午後に学校を出発したが、鄭秀岳は水曜日の日中には巨大な寂しさに包囲され、夜中はベッドで泣いてしまう。木曜日の日中は前日より寂しい感じが薄れたが、李文卿はこのタイミングを狙って鄭秀岳に手紙を出し、夜は一緒に寝たいと書いた。鄭秀岳は断ったが、この夜、李文卿は勝手に馮世芬

のベッドに入り込み一晩を過ごした。鄭秀岳は李から指輪一つをもらうが、この後、鄭秀岳は金曜日の授業内容は殆ど耳に入らず、彼女の頭が混乱する。「馮世芬はなぜ早く戻ってこないのか」、「なんと可愛い指輪だ。でも、もし馮世芬に知れたら、どんなに説教されることか」、「李文卿は下品だけど、本当にお金を惜しまないのだ」、「もし彼女が今夜も来たら、どうしたらいいのか」などと悩んだ結果、鄭秀岳は舎監に休みを願い出て家に帰った。そして、日曜日に馮世芬は上海から戻る。鄭秀岳は馮世芬が戻ったことを知るとすぐに馮の家に行ったが、馮は叔父と西湖に行ったと聞いて鄭は馮を憎らしく思って、嫉妬から「李文卿ともっと仲良くしよう」と思いながら泣きそうになる。しかし、鄭秀岳が自宅に戻るとそこには馮世芬が待っており、その顔を見た瞬間に嬉しくなるのだ。その描写を引用する。

一気に東の部屋まで走って、馮世芬の綺麗な笑顔を見た彼女は、すぐ馮世芬の懐目掛けて飛び込んでいく。両腕は馮世芬の体をしっかり抱き締めて、人目気にせずに悲しさにまみれて泣き出した。最初は小さな声だが、最後は断続的に大声をあげて泣いている。

馮世芬の両手は彼女の頭を撫で付け、何も言わずに、彼女をそのまま泣かせ続ける。十分ほど彼女が心の悲しみを全て泣いて吐き出すのを待ってから、馮世芬は彼女を抱えて、ベッドに連れて行って座らせ、ハンカチを出して彼女の涙をそって拭いた。この時、鄭秀岳は涙が溢れたが微笑した。馮世芬はゆっくりと彼女に尋ねた。

「どうしたの。誰かにいじめられたの？」この言葉を聞いて、止まったばかりの涙がまた流れ出して、頭をまた馮世芬の懐に入れ込んだ。馮世芬はまた暫く待って、彼女の泣き声が少し小さくなった時に、優しく慰めながら「もう泣かないで、何があったのか言ってごらん。誰かにいじめられたの？」と尋ねた。

この優しい言葉を聞いた後、彼女はやっと頭を上げた。涙に溢れた目が馮世芬の顔を見て、頭を振って、何でもないこと、誰にもいじめられていないことを示した。しかし彼女の心の中には、絶大な後悔が生じた。先ほどのあの卑劣の思いを後悔した。「馮世芬は馮世芬なのだ。李文卿は彼女の万分の一にも及ばないのではなかったのか。だめだだめだ、本当にあのようにすべきじゃなかったのだ。私はすぐ学校に戻って指輪を李に返すわ。私はどうしてそこまで下品になってしまったのか」と彼女は思った[10)]。

このように、馮世芬がいない時、鄭秀岳は李文卿との関係で一度動揺したことはあった。しかし、戻った馮世芬の顔を見たとたんに、やはり自分にとって馮は最良の、李文卿は馮の万分の一にも及ばないことに気づいて、動揺も消滅したのだった。

〔鄭秀岳は〕突然、自分の顔を近づけて、馮世芬の顔に暫くの間、深いキスをした。彼女が馮世芬と仲良くなって一年近く、同じベッドで一緒に寝るこの日々の中で、このような行動は初めてのエロチックな行為とはいえるだろう。しかし、二人はどちらも何の刺激も感じずに、ただこれは言葉では形容できない、深い親愛の表れだと思っただけだったのだ[11)]。

このように、寮に戻った後、鄭秀岳は馮世芬の顔にキスをした。

鄭秀岳と馮世芬はその後も一応相変わらず親密ではあったが、上海から戻って以降の馮世芬はいつも何か心配している様子を示す。夏休みを迎え、少し熱中症になった鄭秀岳は五日間自宅に居て外出しなかったが、その間、馮世芬は一度も訪れなかった。そこへ、馮の手紙が届く。手紙から馮世芬が叔父の陳応環と駆け落ちしたことを知り鄭秀岳は非常に衝撃を受ける。ここで、鄭秀岳と馮世芬の学生時代の「恋愛物語」には一段落がつけられる。

では、鄭秀岳と馮世芬の関係を整理してみよう。容姿が良い、成績が良い、同じ没落小資産階級家庭の娘、これらは鄭秀岳と馮世芬の相似点であり、加えて隣席、同室であることは二人が友達になる前提だと言えよう。二人は友達になったきっかけは人力車で、馮世芬は困っている鄭秀岳を助けるからである。ここから二人は親密になり、二人だけの空間を形成した。生活面では、学校にいる時二人はいつも一緒に行動する。休みの日もお互いの家に遊びに行く。寝る時も一緒にいるために二人は寝室のベッドを隣に揃えている。精神面では、鄭秀岳は馮世芬を信頼して依存している。例えば、鄭秀岳は月経が始まるとすぐに馮世芬に相談する。グラウンドで李文卿と遭遇した時、不安になった鄭秀岳は馮世芬の背後に隠れている。更に、もし五分間ほども馮世芬がそばにいないと、鄭は全世界に捨てられたと感じてしまう。一方、馮世芬は鄭秀岳の教育係を担当する。彼女は金銭より精神の進歩（共産主義思想を指す）が大事だといった精神の有り様や思想を鄭秀岳に教える。鄭秀岳は李文卿の影響で動揺したことがあるが、馮世芬はかけがえのない人だと考えている。しかし、二人は女学生の間に広まっている「秘密ニュース」のような、肉体面における性的行為までは発生しなかったし、それを理解もしていなかった。鄭秀岳と馮世芬の二人の空間は、お互いに信頼できる二人だけの、純潔なスペースだと言えよう。

つまり、女学校という特定の環境で、鄭秀岳と馮世芬の間に他人が入る余地がない空間を形成した。しかし、鄭秀岳と馮世芬だけの空間を「破壊」しようした人間がいる。それは李文卿と馮世芬の叔父陳応環である。馮世芬が叔父を迎えるために暫く鄭秀岳から離れる時、李文卿は馮のベッドに入り込んで鄭秀岳と一晩を過ごした。李文卿の財力に惹かれた鄭秀岳は馮世芬がいない時に一度動揺したが、馮が戻ってくると逆に馮のことが以前より一層好きになったし、二人の感情は更に親密になった。しかし、馮世芬の叔父、陳応環は小説の中に直接的には登場してはいないが、彼は密かに馮と手紙をやり取りして馮に革命的な思想を教えているのだ。馮世芬が日々鄭秀岳に説教した内容はほぼ叔父から教えてもらった内容である。馮世芬が駆け落ちする原因は、叔父と一緒に革命に参加したいからである。馮世芬の叔父は鄭と馮で構成する空間の内部に潜んでいる者だと位置付けるのが妥当であろう。

2、李文卿の介入

「弱女子」における女学生の「恋愛物語」を分析する際には、もう一人の重要人物、李文卿に注目しなければならない。鄭秀岳と馮世芬の関係は非常に純潔で純粋な友情だが、李文卿は他の女学生と性的関係を持っていることが暗示されている（第三節）。李文卿の初登場は第一節で、馮世芬が鄭秀岳を助けている姿を目撃したことから始まる。鄭と馮が人力車に乗って行ったことを見ている李文卿は、「チッ、この一対のちびはかなり面白い[12)]」とつぶやく。李文卿は既に鄭秀岳と馮世芬に興味を持ち始めており、李文卿が鄭と馮の二人の空間に介入しようとしていることの伏線と言え

よう。

容姿が良い、成績が良い、同じ没落の小資産階級家庭の娘などは鄭秀岳と馮世芬の相似点であり、二人が親密になった前提と言える。では、李文卿はどうだろう。彼女が初登場する際の描写である。

> 二人が手を繋いで車に乗った時、正門の警備室の中には、二年生の背が高くて体も大きな金剛のような李文卿がいて、ずっと彼女たちを見ている。李文卿の顔には、たくさんの赤黒いそばかすが散らばっていて、たくましい中年男性よりも顔が大きい。彼女が制服を作った時、サイズが大きくて手間がかかるので、二倍の金を要求された。話し出すと、彼女の声は大きくてかすれるから、まるで徐千歳が『二進宮』を歌うようだ。しかし、彼女の家はお金持ちだ。彼女の獅子鼻にかけた金縁の眼鏡こそが、クラスの零落しつつある小資産階級の子女たちの憧れの目標だ。学校に入った時、彼女の両手にはそれぞれ三、四個の金指輪をはめていた。舎監に注意された際には、「なんでもない。外すわ、外せばいいんでしょう」とだらしなくブツブツと呟きながら指輪を抜いた。彼女は良く勉強してはいるが、読む本は『二度梅』、『十美図』などの旧式小説だ。最新のものと言っても鴛鴦胡蝶式の因縁話の類の本だけだ。しかし、彼女は一つ得意なところがある。それは金を惜しみなく使って、クラスメートたちと広く深い交際を進めているのだ[13)]。

このように、李文卿の容姿は綺麗だとは言えないし、好きな本は馮世芬と全く異なっている。更に、彼女はお金持ちで、女学生たちと付き合うことを好んでいる。学校の講演会で李は馮と遭遇した後、彼女に興味を持ち、先述の腕時計の件が発生した。そこから、李文卿は正式的に鄭と馮の二人の空間に介入しようと努力し始めたと言えよう。

李文卿の具体的な行為と結果は以下のようである。

①グラウンドを散歩している鄭秀岳と馮世芬に声かけ、馮に腕時計をプレゼントした。
→馮世芬に断られた。

②使用人を使って自習室に戻った馮世芬に腕時計と手紙を送った。
→鄭秀岳は明日に返すと提案し、腕時計をつけたまま寝た。後に馮に説教されて悔いる。

③腕時計を返しに来た鄭秀岳に興味を持ち始めた。腕時計を鄭秀岳に送って文通しようと提案した。この後、毎日密かに鄭秀岳に手紙を送る。
→馮世芬がそばにいるため、鄭秀岳は返信しなかった。

④馮世芬が離れた時、鄭秀岳に手紙を送って、今晩寮で一緒に寝ようと提案した。
→鄭秀岳は困った後、返信して断った。

⑤鄭秀岳の断りを無視し、夜、こっそり馮のベッドに上って鄭秀岳のそばに行く。鄭秀岳の手を握って強引に自分の裸体に触らせる。鄭秀岳の抵抗を感じて、鄭の指に一つの指輪をはめて、それを彼女にプレゼントする。
→李文卿の財力に惹かれた鄭秀岳は困ってしまい、実家に戻った。

このように、李文卿は密かに鄭秀岳に手紙を送ったが、馮世芬の存在から鄭秀岳の返信はもらえなかった。馮世芬が暫く学校にいない時が来て、李文卿は勝手に馮のベッドに入り込んで鄭秀岳と

性的関係を発生させようと試みたが、鄭に断られる。ただ、この時、鄭秀岳が非常に動揺していることに気づく。しかし、馮世芬が帰ってきた後、二人の関係も更に親密となった。李文卿は鄭と馮の二人の空間に更に介入しようと努力したが、結局実現できなかった。馮世芬がいる限り、鄭秀岳の精神は満足な状態なので、「堕落」（李文卿を代表する金銭と肉欲）に陥らないのだった。

しかし、馮世芬が叔父と駆け落ちした後、鄭秀岳と李文卿は付き合い始めて恋人となった。では、鄭秀岳と李文卿の間は、二人だけの空間を形成することができたのであろうか。

馮世芬が駆け落ちした後、夏休みに、鄭秀岳は張康（かつて馮世芬を慕った教員）と李文卿の間で定期的に文通している。新学期が始まる前日、李文卿は旅館の使用人に頼んで鄭秀岳に一反の絹織物を送って、西湖で昼食を共にするように誘っている。この夏休みは、馮世芬がいないため、鄭秀岳はほぼ外に出て遊んでいなかった。そこで、彼女はすぐ李文卿の誘いに乗り、先に着いて李を待っている。約二十分遅れて李文卿が彼女の父とともにやって来た。李文卿は鄭秀岳と会った後、自分の父が勝手に来たと怒っている様子で鄭秀岳に説明した[14]。父がいるので、李文卿は非常に不満で、鄭秀岳と観光する計画をやめた。食事後、鄭秀岳は李文卿と父が泊まる旅館に行き、外の綺麗な景色を見ながら暫く李と愉快な雑談をした。

新学期が始まったものの、生徒たちがまだ揃っていないため授業はまだ始まらず、学校の管理も厳しくなかったので、李文卿と鄭秀岳はある日の午後、休みを取って、一緒に西湖まで遊びに行って夕食をとった。この後、二人は李がよく利用する旅館に泊まった。部屋で李文卿はまず服を全部脱いで裸になった。李文卿は鄭秀岳にも同じくするように誘ったが、鄭は恥ずかしくて抵抗した後、上半身だけを脱いだ。二人はベッドに入ると、李文卿はすぐ熟睡したが、鄭秀岳はなかなか眠れなかった。夜中、熟睡している鄭秀岳は下半身の痛みを感じて目覚め、横にいるはずの李文卿がいつの間にか自分の対面にいると気づく。鄭秀岳の両手は李文卿に掴まれて反抗できず、李文卿は性具を使いながら鄭秀岳と性行為を発生させた。これは鄭秀岳にとっては正式的に李文卿と付き合い始めることを意味していた。

> 彼女〔鄭〕の李文卿に対する熱愛は馮世芬より激烈だった。馮世芬はただ彼女に学問上の援助と精神上の啓蒙を与えたのみだったが、李文卿は金銭という物質上の贈与を与えた上に、彼女を肉体的な現実の楽園へと導き入れのだった[15]。

こうして、鄭秀岳にとって李文卿は自分の寂しさを完全に慰める人間だったと言えよう。しかし、付き合ってから二ヶ月後、李文卿は史麗娟という女学生に興味に移して、鄭秀岳のところに来なくなった。復讐と考えた鄭秀岳はグラウンドを散歩している李文卿と史麗娟と喧嘩をした後、ようやく李文卿と一晩を共にできたが、これ以降、李文卿と史麗娟の関係が更によくなったため、鄭秀岳と李文卿の恋愛関係は終わりを迎えた。

鄭秀岳と李文卿の間には、二人だけの空間は形成されなかったと言えよう。鄭秀岳が李文卿に恋する最大の理由は、李から肉体の快感を得て、その快感が馮世芬と別れた後の寂しさを癒やしたからである。ただ、李文卿にとって鄭秀岳はあくまで一時的な性対象に過ぎない。鄭秀岳と李文卿が付き合うきっかけは、李が強制的に鄭と性行為を発生させたことである。彼女たちの恋愛の期間は、李がどのぐらい鄭を性の対象とすることができるかによって決められている。つまり、女学生

を含め、数多くの人々と性関係を保つことを求める李文卿は、鄭秀岳との間に、二人だけの空間を作る条件は最初から存在していない。鄭秀岳が求める李文卿との二人だけの恋愛は本来的に実現不可能だったのである。

一方、筆者にとって興味深いのは、李文卿と別れた後、鄭秀岳は再び馮世芬のことを思い出した点である。

> 彼女は謀を尽くして、精力も続かなくなった。後悔して失望が極点までに到った時、急に馮世芬の言葉を思い出した。「肉体の美は頼りにならないもので、人格の美こそが永遠で、偉大なものである」。
>
> どうしようもない中、彼女は方向を変えることを改めて決めた。今後、自分のすべての精力を人類の解放、社会の改革事業に注ごうと考えた。
>
> しかしこの空しい理想は、最終的には実際の血と肉を持つものではない。第一に、彼女の肉体は、この狭く長い桟道を歩ませることを許さない。第二に、彼女の感情、彼女の後悔、彼女の怨嗟は、彼女自身の弱い意志のせいで、元来は全校に軽蔑されていた李文卿の罠に彼女が落ち入ったことを許さないからだ[16)]。

鄭秀岳の自己分析通り、彼女は馮世芬が教えてくれた理想が素敵なものだと分かっているが、馮が離れた後に李文卿と付き合って以来、自分は既に肉体的欲望に支配されてしまったので、以前の自分には戻れなくなったと意識したのである。女学生同士の恋愛の失敗に衝撃を受けた鄭秀岳は、これ以降、男性との交際に転向していくのだった[17)]。

3、男性のかげ

注16で紹介した鄭秀岳と性的関係を持つ男性教員の李得中と張康は、彼女が李文卿と別れた後に、付き合った人物なので、鄭秀岳と馮世芬、鄭秀岳と李文卿の関係に対する影響はほとんど存在しない。本節で分析する「女学生同士の恋愛物語」に登場する男性人物、そして男性に近い人物とは馮世芬の叔父、陳応環と李文卿である。

陳応環は小説には直接に登場するのではなく、彼に関する情報は主に馮世芬から知らされる。鄭秀岳は、李文卿が馮に腕時計を贈った時に書いた手紙は、自分が以前にもらった手紙と比べて、文章が最もいいと褒め立てた。逆に、馮世芬は李文卿の手紙を読んだ後も褒める気がない様子である。鄭秀岳はどんな手紙の文章がいいと思うのかと馮に聞いた。馮世芬はポケットから一通の手紙を出して鄭に渡して、「これこそが私が言った重要な手紙よ」と語った。それが、陳応環からの手紙だった。以下は手紙の内容である。

> 世芬小同志へ
>
> 別れてから三年が経て、手紙のやり取りも少なくなった。この手紙は恐らく私がヨーロッパから出す最後の一通だろう。三日後にシベリアを経て中国に戻るからだ。
>
> 君の去年の年末の手紙はスイスで受け取った。君の思想はやはり進歩した。私の二年間の啓発の努力に本当に背かずにいた。広州に戻った後、君に数名の友人を紹介する。君を社会を改

造する重任を担う人材に改造したい。中国目前の最大の圧迫は各国帝国主義の侵略、封建的な残存勢力、軍閥集団、外国商社の買弁で、これら全てが帝国主義者の忠実な代理人だ。彼らはまた内地の土豪劣紳とも繋がって、それで民衆は自然に苦境を脱却できなくなっている。しかし、民衆はすでに覚悟している。大革命の始まりはさほど遠くない。広州ではすでに準備が始まっている。私も杭州に戻って数日泊まった後、南に行って革命基盤の建設に参加して行く。しかし、中国の軍閥は非常に根が深く強い。一つ倒しても二つ生まれる恐れがある。今、党内でこのことを防ぐ対策を講じている。軍閥を革命することは旧式軍閥を転換させるより万倍も恐るべきだからだ。

私は今回同行する友人が多い。メキシコで一ヶ月泊まって、遅くでも新暦の五月末には上海に着く。君は頑張って勉強して、体に注意してほしい。君と再会する時、君の顔に二つのりんごのような赤く丸い頬を見ることができるように。

君の叔父陳応環　二月末ベルリンにて[18)]

鄭秀岳はこの手紙を読み終わった後、ある力を感じた。これは馮世芬が自分に日々話してくれた言葉で、馮世芬の見解はこの手紙の書き手からもらったものに違いないと鄭秀岳は察した。馮世芬から、陳応環は馮の母の従兄弟で今年二十六歳、以前は上海の同済大学で工科を勉強していたことを知られる。鄭秀岳がどうして叔父のことを自分に話さないのかと馮世芬に聞いた時、馮は「私があなたに話したことは、全て彼が私に教えてくれたことだったの。手紙を見せなかったこと、名前や経歴を教えなかったことは、ただそれはこの言葉が信頼できることとは関係のない私事に過ぎなかったからで、彼のやることや重要で意義がある話は、私はそのほとんど全てをあなたに話したわ[19)]」と説明した。陳応環の登場は手紙という形だが、彼が馮世芬に与えた影響の大きさは明らかである。ここでは馮世芬と陳応環が恋愛関係にあることは読者にはまだ明らかにされていない。それを示したのは、馮世芬が駆け落ちした後に鄭秀岳に残した手紙である。

秀岳。私の五月からの苦悶が知っていますか。人には理性があるけど、感情もあります。私は今、すでにある宗族社会の定めが許すことのできない罪を犯しました。特に、封建思想が最も深く、視線が最も狭い杭州においてなのです。でも、社会は前進的で、恋愛は神聖的です。私たちには私たちの主張があり、私たちは私たちの権利をも争わなければならないのです[20)]。

馮世芬と陳応環が恋人関係にあること、五月には駆け落ちを決めていたことがここから読み取れる。ただ、鄭秀岳と馮世芬がキスをした時、馮世芬と陳応環は既に恋愛関係にあったのか、それとも五月に恋愛関係を確定したのか、小説は説明していない。馮世芬と陳応環が付き合う過程にも言及していない。一見、陳応環は鄭秀岳と馮世芬の学校生活と直接的には関わってはいないが、実際には陳応環の存在感が大きいことは間違いない。陳応環と馮世芬はいつも通信があり、陳応環は馮世芬の教育係で、馮世芬は鄭秀岳の教育係である。馮世芬が鄭秀岳に日々教えることは陳から教えられたことで、陳応環は鄭秀岳と馮世芬が作った空間の内部の「潜入者」だと呼べるのである。

次に李文卿を取り上げるのだが、陳応環と違って李文卿の性別は明らに女性であるにもかかわら

ず、なぜ彼女を「男性」として分析するのか。それは小説の中に、彼女を男性のような特徴を持つ存在として描く場面が数多くあるからだ。

前述したように李文卿が初めて登場する時、彼女の外見について、「逞しい中年男性よりも顔が大きい」、「徐千歳が『二進宮』を歌うよう」に話すといった描写がある。ほかにもまだ何箇所が看取できよう。例えば、「彼女は男のように舌を鳴らして独り言を言った[21)]」、「逞しい男のように「ははは」と大声を挙げて幾度も笑った[22)]」といった具合である。三人の女性主人公が初めて登場した際の外見描写から見れば、鄭秀岳は他人より優れた美貌の持ち主で、馮世芬も可愛らしい少女である。だが、李文卿は「男性」的で、更には、「男性より男性」的に描かれていることが見出せる。

また、李文卿が初登場する時、「彼女の家は金持ちだ。彼女の獅子鼻にかけた金縁の眼鏡こそが、クラスの零落しつつある小資産階級の子女たちの憧れの的だ」と描写されている。李文卿が馮世芬のベッドで寝ている時は、「李文卿の顔は上に向き、獅子鼻が開いて、男のように大きな鼾をかきながらそこで熟睡している[23)]」と描かれた。この「獅子鼻」はまさに李文卿の外見的特徴だと言える。郁達夫の他の小説にも「獅子鼻」という表現が存在する。「春潮」（1922年12月）の主人公詩礼の顔にも「獅子鼻」が付いている。「出奔」（1935年11月）の主人公董玉林の鼻も「空に向く獅子鼻」と描かれた。しかも、董玉林の一族の特徴こそ「獅子鼻」は特徴なのに、娘の董婉珍の鼻は「獅子鼻」ではなかったとわざわざ強調されているのだ。「董氏一族の空に向く獅子鼻が、彼女の母玉林嫂の鷹鼻と組み合されたので、婉珍の顔は穏やかで平凡なものとなった。他人から特に注目もされず、他人に嫌がられもしなかった[24)]」。このように、郁達夫の小説では、「獅子鼻」という表現が三つの作品中で主人公の外見的特徴として現れた。しかし、注意すべきなのは、「獅子鼻」が付いている顔は綺麗ではないと認識され、しかも、詩礼と董玉林はともに男性だった。特に、董玉林という人物は典型的な利益至上主義者で、農民を搾取する否定的人物である。李文卿を除いて、「獅子鼻」はすべて男性の外見的特徴として用いられている点に留意したい。

このように、李文卿の外見を男性らしく描写することも多く、仕草も「男性的」に描かれる。女性であるが見た目は普通の女性と違い、更に、「獅子鼻」の描写を加えて、男性に近いことを読者に印象付けている。また、李文卿は女学生たちと性行為を行う際には、いつも性具を使い「挿入側」となるのである。

結果からみれば、鄭秀岳と馮世芬の「恋愛物語」は馮と陳応環の駆け落ちにより終わりを告げた。鄭秀岳は李文卿と性行為を行った後、恋愛関係を確立したが、李のイメージは男性に近いし、性行為においても「挿入側」、つまり男性となる。このように、鄭秀岳と馮世芬のような女学生同士が作った二人の空間においても、また鄭秀岳と李文卿のような女学生同士の恋愛の中においても、「男性」の存在感が大きいのである。これが「弱女子」の一つの特徴だと言えよう。特に、女学生である李文卿の男性のような人物像は、郁達夫の小説の中で初めて登場するのである。女学生同士の恋愛においても、必ず「男性」のイメージが含まれていること、そして「男性」の存在のためにその恋愛が実現しにくくなることが、「弱女子」の前半に表れた女学生の同性愛関係の特徴なのであると言えよう。

二、女学校を離れた後の鄭秀岳と馮世芬の絆

小説の後半において、学校から離れた鄭秀岳は上海で呉一粟と恋に落ち結婚する。一方、馮世芬は上海で女工となる。過去には親密であった二人は異なる道を歩むことになるが、彼女たちの繋がりが残したものは少なくない。まず、鄭秀岳の結婚対象である呉一粟は馮世芬といくつか相似点がある。また、結婚後の鄭秀岳と馮世芬は再会すると心境に変化が生じした。最後に、馮世芬は鄭秀岳の死体を入棺する。本章では、小説の後半における卒業後の鄭秀岳と馮世芬の関係を中心に分析し進める。

1、呉一粟と馮世芬の相似点

小説の後半は、鄭秀岳と両親が戦乱の杭州から上海に逃げたことから始まる。鄭秀岳一家は上海の滬西で、上流階級の戴氏が所有する住宅の二階の部屋を借りた。同じ戴氏の部屋を借りていたのは本小説の男性主人公呉一粟で、彼は「前楼」に住んでいる。入居した後、鄭秀岳は戴氏の使用人から呉一粟に関する情報を得る。鄭秀岳は使用人から呉一粟への賛美な言葉を聞いた後、彼に対して興味を持ち始めた。ただ、平日は呉一粟が外出するため、二人の時間は合わず、鄭秀岳が引っ越ししてから約一週間を経ても呉一粟とは会えなかった。しかし、次の日曜日の午後、鄭秀岳は前楼で寧波弁を使っている男の声を聞いた。彼女は窓から外へ眺め、ようやく呉一粟の顔を見た。ここでは、鄭秀岳が見た呉一粟の外見について紹介する。

> （彼は）肌が白く、鼻がとても高く、目が普通の人より少し大きい。顔は長方形だ。鄭秀岳は、彼が半身を窓から出して、天井のところで駱駝の毛の上着とか、シャツとかを干しているのを見ると、心が突然動いた。この顔がとても懐かしく思えて、よく考えてみると、少し微笑みが浮かんだ。何と彼の目鼻立ちは、馮世芬と多くの共通点があったのだ[25]。

このように、呉一粟の顔が馮世芬とよく似ているため、鄭秀岳は呉一粟の顔を見た時、一目惚れとまでは言えないかもしれないが、少なくとも非常に親近感を抱いている。大晦日の夜に大家の戴氏は鄭秀岳一家と呉一粟を招待して一緒に夕食を囲む。呉一粟は非常に内気なので、同郷の戴氏は彼の代わりに彼の出身などを鄭秀岳一家に伝えた。

> 彼の両親はすでに亡くなって、財産は残っていなかった。寧波の第四中学校から卒業するまでの学費は、ある書館に勤めていた彼の叔父、呉卓人に出してもらった。今、呉卓人は山東省の女子師範学校の校長になって、呉一粟だけが上海に残っている。あの『婦女雑誌』は元々呉卓人が編集していた雑誌だったが、呉一粟は中学校卒業後、大学に進学する余裕がないため、呉卓人の推薦で書館の校正の仕事に就いた。二年を経って、彼は昇進して編集者になり、叔父の助手として『婦女雑誌』の編集に従事した。二年前、叔父が校長になって去った後は、『婦女雑誌』の名義上の主編は呉卓人だが、実際は彼が主要な仕事を担当しているのだった[26]。

ここで、鄭秀岳は再び衝撃を受け心を動かすのだった。

鄭秀岳は「呉卓人」の名前を聞いた時、心が動いた。この名前は馮世芬と親しくしている時、雑誌でよく見た名前だった。彼女たちの学校でも『婦女雑誌』を購読する人がたくさんいた。これらの話を聞いた鄭秀岳は少し後悔する。馮世芬が去ってから一年余りの間、彼女はただ情事に溺れ、本を読まなくなっていたし、雑誌も読んでいなかった。だから、中国の文化界と婦女界についてほとんどなにも知らなかった。彼女の父と呉一粟が話している間、彼女は静かに呉一粟の俯いた顔をじっくりと見続けていて、心の中でしっかりと向上しなければならないとの決心を固めた。

「今後はもっと本を読もう！この世のことをもっと知ろう！こんな同居人がすぐそばにいるから、この機会は逃せない。もしかしたら大学に進学するよりもすごいかもしれない」[27)]。

このように、鄭秀岳が改めて呉一粟に親近感を生じた理由は、呉が編集している雑誌は自分が学生時代に、馮世芬と仲良くしていた時に読んだ雑誌だったからだ。鄭秀岳は馮世芬のことを思い出し、馮世芬が去った後の自分の行為について後悔する。呉一粟が『婦女雑誌』の編集者であることは、鄭秀岳に彼が馮世芬と同じく思想上で進歩的な人であると想起させる。

この後、鄭秀岳と呉一粟の交流が徐々に多くなっていく。最初、鄭秀岳は呉一粟の部屋に入ることはなかったが、後には呉一粟の部屋で少し会話するようになる。そして、呉一粟との接触の中で、鄭秀岳は反省を進めていく。

馮世芬と親しくしていた時、彼女は学問を尊重し、人格を尊重し、知識を尊重したが、李文卿と知り合った後、李文卿の考え方が悪くないと思って、世の中で最も重要なものは金銭だと思った。しかし、今環境が変わり、上海まで逃げて、図らずもこの呉一粟と出会ってから、彼女の考えにも変化が生じた。結局は馮世芬が言っていたことが正しかったのだと感じた。だから、彼女は借りた新聞を返した後に、呉一粟に過去一年分の『婦女雑誌』二巻を貸してくれるように頼んだ[28)]。

つまり、呉一粟の外見は馮世芬と似ており、呉一粟が編集する『婦女雑誌』は鄭秀岳に自分の学生時代、馮世芬と親しくしていた時期を思い出させた。これが最初に、鄭秀岳が呉一粟に対して親近感を持ち始めた理由である。鄭と呉二人の接触が多くなった後、彼女は自分が馮世芬と李文卿の付き合いを反省し、やはり馮世芬が教えてくれた人格と知識を尊重することが大事だと意識すると同時に、鄭秀岳は呉一粟の知識人らしい姿に心を惹かれ始めるのだ。鄭秀岳が呉一粟に好意を抱いていく過程で、馮世芬の姿を何度も浮かべたことは、馮世芬が鄭秀岳に影響を与えたことの証左と言っても過言ではないであろう。

2、鄭秀岳と馮世芬の再会から死別まで

馮世芬は上海で負傷した女工として再登場する。1927年の四・一二クーデターの一環で、上海の糾察隊が全員殺害されたと聞いた彼女は広州から上海に戻り、糾察隊本部に属する陳応環の死体を発見した。一方、この間に、鄭秀岳と呉一粟はお互いに告白して結婚すると決めている。結婚した後、鄭秀岳と呉一粟の感情は非常に良いが、約一年間を経て呉一粟は異常な夢精の病気にかかっ

てしまう。その後、呉一粟の夢精は治ったが不眠症になったため、書館を辞職させられた。呉一粟の心情が悪くなり、鄭秀岳とよく衝突を起こす。経済的余裕も失ったので、二人は安い住居に引っ越そうと考えた。引っ越し先を探す最中、鄭秀岳はある日の夕方、電車の中で馮世芬と再会する。以下は二人が再会する場面である。

> 馮世芬は年をとった。彼女の綺麗な面長の顔には、よく見ると、何本もの細い皺がある。彼女の青い布のシャツと黒い布のズボンは彼女の年齢を十歳も上乗せさせている。
>
> 最初、鄭秀岳が三等電車に乗った時には、彼女に気づいていなかった。日昇楼駅に到着しそうになって二人が降りる準備をした時、馮世芬が座席から立ってドア近くに座っている鄭秀岳のそばにやってきた。片手を鄭秀岳の肩に置いて、馮世芬が親しく温かい口調で彼女に声をかけたので、鄭秀岳はやっと驚いて飛び上がったのだ。
>
> 二人は電車から降りた。先施公司の軒下に佇んで、お互いの近況報告を詳しく語り合った[29]。

今回も二人が初対面の時のように、馮世芬が先に鄭秀岳に声をかけている。馮世芬が親しくて温かい口調で声をかけたと描かれた点から、彼女の嬉しい気持ちがよく分かる。鄭秀岳は驚いたが、この後の近況報告の内容から、二人は依然としてお互いに信頼していることがよく分かる。ここでは、鄭秀岳の近況報告とその後の心理の描写を引用する。

> 鄭秀岳も昔のことを簡単に話した後、自分と呉一粟との近況を彼女に語った。彼が最近でどのように自分を虐待するか、失業と不眠症のため、毎晩酒を飲まないわけにいかず、今日は彼に酒を買うために出かけて来ていたのだと話した。最後に、自分たちは今、安い部屋へ引っ越したいことを話して、滬東には適当な部屋があるかと馮世芬に尋ねた[30]。
>
> （中略）
>
> 学校で馮世芬と一緒にいた時の状況、馮世芬が出て行った後の自分の感情や変化、更に馮世芬の母に対して本当に申し訳なかったなどを思い出した。馮世芬が去って行ったその年の夏休みに、彼女の母のところに一、二回行ったことがあるだけで、それ以降は一度も行ったことがなかった。
>
> 最後になって、今の自分のことに考えが戻っていく。呉一粟の自分に対する冷淡さと虐待を考えれば考えるほど、腹が立ってきて、ますます悔しくなる。まさに涙が流れそうになった時、電車はもう降りないわけにいかない駅に到着した[31]。

鄭秀岳のこの近況報告の中心内容は、間違いなく呉一粟の自分に対する虐待である。学生時代、馮世芬が暫く上海に行った後、李文卿が強引に自分の隣に寝に来る頃の鄭秀岳は、馮世芬が戻ってきた時、彼女の懐中に飛び込んで泣いたが、その後、やはり馮世芬が最も良いと鄭秀岳は思ったものだった。現在、馮世芬と再会した鄭秀岳がまず自分の精神上の苦しみを語ることは、馮世芬に依存し甘える行為が以前と変わらないことを示しているだろう。また、この後、鄭秀岳は馮世芬と一緒に過ごした日々を思い出し、現在の自分の状況そして呉一粟に対する不満と悔しさを爆発させた。

鄭秀岳が馮世芬と再会した後に不満が爆発した点については、次のような描写も存在する。それは、帰宅した鄭秀岳が呉一粟に、馮世芬と彼女の叔父との駆け落ちについて教えた際である。

> 馮世芬の叔父さんの性格は絶対に変わらないと思う。彼の最近の様子を教えてくれなかったが、彼は馮世芬に対して、きっと最初の頃と同じだと思う。しかし、一粟、あなたは？何で最近こんなに変わったのか？私は経済的な圧迫は怖くないが、あなたの最初のあのように熱い愛は、今はこんなにも冷めてしまった。このことは私を本当に悲しくさせる[32)]。

このように、馮世芬が陳応環とすでに死別していることを知らない鄭秀岳だが、呉一粟の自分に対する愛を陳応環の馮世芬に対する愛と比べた結果、呉一粟が変わった、自分に対する冷たくなったという結論を出したのだった。馮世芬の駆け落ちは間違いなく鄭秀岳に大きな衝撃を与えた。恐らく鄭秀岳は馮世芬と陳応環の情熱的な愛情が羨ましく、自分もこのような愛情が欲しくなったのだろう。しかし、呉一粟はこのような愛情を提供してくれなかった。

また、鄭秀岳のこうした考え方を馮世芬はよく知っている。馮世芬は鄭秀岳と呉一粟に面会して彼らに賃貸住宅の案内をした際に、呉一粟とは初対面にもかかわらず、馮世芬は彼を叱責した。

> 呉さん、あなたの失業は確かに残念なことですが、なぜ鄭秀岳をこのように虐待するのですか？何年も同居したのに、彼女の性格が分らないのですか？彼女は一刻もそばにいる人の慰めや愛情から離れないのです。こんなに冷淡にして、彼女の熱狂的な心を誰に託させようとしているのですか？[33)]

馮世芬が紹介した住所へ引っ越した後も鄭秀岳と呉一粟の経済状況は更に悪くなり、鄭秀岳が呉に対して絶望するに至った時、鄭秀岳は、以前に自分と性的関係を持った李文卿、そして李得中と張康に同じ内容の手紙を書いて、援助と愛情を求めた。三人と文通を続けながら、鄭秀岳は杭州で、李得中や李文卿と面会した。また、上海に戻った鄭秀岳は張康の連絡を得て旅館に行った。鄭秀岳が夜十時を過ぎても帰宅しないので、張康のメモを見た呉一粟はその旅館に出向いて、ほぼ全裸で、怪我をしている鄭秀岳と張康と遭遇する。張康の話では、自分は鄭秀岳と寝た後、彼女の下着のポケットから李得中のラブレターを見つけたので鄭を殴ったとのことだった。呉一粟が鄭秀岳を家に連れ戻った一ヶ月後、上海で一・二八事変が起こり、日本兵は呉一粟を殴って強引に鄭秀岳を連れて行った。数日後、避難所に収容された呉一粟は意識が混乱して、ひたすら壁に向かって「彼女を許してください。彼女を許してください。彼女は一人の弱い女子なのです[34)]」と繰り返して叫ぶのだった。そして、小説の最後は馮世芬が鄭秀岳を棺に入れるシーンである。以下、引用する。

> 五、六人は全て同じ裸体を曝し、血にまみれた若い女生の死体の中で、その女工は目と口を開いたまま、下半身の青い腫れが酷く、右の胸が切られた鄭秀岳の死体だと判明した。
>
> 彼女（馮世芬）はこの輪姦されて命を失ったクラスメートの死体を見つけた後、経験者のように同志たちにそこを守らせて、自分はすぐ外に行って薄っぺらの棺を手に入れてきて彼女の死体を収納する。

彼女は自分の綿入れのズボンの外側の青い布をはいで、その裸の死体にきちんと着せて、他の同志と一緒に棺に運び入れた。棺の蓋を閉める時、彼女はまたあの死体の顔に向かって、「鄭秀岳……鄭秀岳……あなたはやっとあなたらしく、この弱い人生を貫いた」と親しく温かく呼びかけた。彼女はまた少しぼんやりとこの死体を見ている。彼女の綺麗な面長の意志が強い顔に二粒の涙が流れた。

馮世芬が納棺した惨殺された遺体は、数えてみればこの五年間で、これは彼女の第二回目の経験だった[35)]。

鄭秀岳は殺害された。彼女の死体は馮世芬に発見され、馮世芬は彼女の惨めな死体を入棺する。小説の最後のシーンは非常に衝撃だと言えよう。馮世芬は鄭秀岳の死体を見つけた後、すぐ自分の服を優しく鄭に着せて、以前と同じく親しく温かい口調で鄭に声をかける。更に、入棺の時、馮世芬は涙を流したのは、陳応環の死以来二回目の経験だった。馮世芬の悲しみ、そして彼女にとっての鄭秀岳の重要さを見出すことができるだろう。また、馮世芬が鄭秀岳に最後にかけた言葉、「あなたはやっとあなたのように、この弱い人生を貫いた」は、呉一粟の「彼女を許してください。彼女を許してください。彼女は一人の弱い女子なのです」[36)] と同じく鄭秀岳を「弱い」と表現している。ただ、男性に暴力を受けた鄭秀岳に対して呉一粟が語った「弱い女子」と、鄭秀岳の死体を見た馮世芬が口にした「弱い人生」におけるこの二つ「弱い」は、内容が異なると筆者は考えている。学生時代から鄭秀岳と親密になり彼女の教育係を担当する馮世芬は、鄭秀岳の動揺しやすく、他人に依存しすぎ、感情に左右するなどの性格をよく知っている。ここでは馮世芬が口にした「弱い」はより精神面のことを指しているだろう。

このように、小説の後半は鄭秀岳の恋愛と結婚を中心に展開するが、馮世芬は鄭秀岳と呉一粟の恋愛過程に、回想という形で何回も登場した。馮世芬と陳応環の恋愛は鄭秀岳が求めた理想的な恋愛である。つまり、馮世芬はいつも鄭秀岳に影響を与えていると言えよう。前章で言及したが、鄭秀岳は李文卿と喧嘩した後も馮世芬の「理想」についての見解を思い出している。馮世芬に似ていて、そして「理想」を持つ青年呉一粟と出会い、彼と恋に落ちるのは、鄭秀岳と馮世芬の絆を改めて証明していると言えるだろう。鄭秀岳と馮世芬の絆を最も体現しているのは、最後の死別のシーンである。学生時代に馮世芬と鄭秀岳が知り合う契機は、馮が鄭を助けたことだった。小説の後半で馮世芬と鄭秀岳が再会した後も、馮が困っている鄭に住居を紹介している。馮世芬はいつも鄭秀岳を助ける役である。従って、馮世芬の役割を考えると、鄭秀岳を入棺するのが馮世芬であることは非常に条理にかなっている。更に、小説は主に鄭秀岳の視点から馮世芬への依存を表現しているが、最後のシーンは逆に馮世芬の鄭秀岳に対する深い感情を表現したのである。

おわりに

本稿では「弱女子」における鄭秀岳と馮世芬、鄭秀岳と李文卿の恋愛の特徴を論じた。学校内で、鄭秀岳と馮世芬は、お互いに信頼できる二人だけの純潔な空間を形成した。鄭秀岳と李文卿は性的関係を保っていたが、二人だけの空間は最初から存在しなかった。また、鄭秀岳と馮世芬の空間には陳応環が潜在し、かつ李文卿は男性のような人物と描かれている。卒業後、馮世芬は鄭秀岳

の恋愛観に影響を与え、鄭秀岳と馮世芬の間には精神面の繋がりが強く表現された。

小説は、第一の主人公である鄭秀岳の恋愛と結婚を中心に展開される。彼女の恋愛経過について振り返ると、鄭秀岳は李文卿との交際では性的な快楽を得た。また、呉一粟との関係によって男女の結婚が実現している。しかし、鄭秀岳と馮世芬の学生時代の付き合いと比べると、彼女の精神世界は虚無感に満ち、常に満足していない状態に留まってしまうのだ。

当時の男性作家たちは女学生同士の親密な関係を避け、軽蔑する傾向があるが、郁達夫は大胆にもその女学生同士の恋愛というテーマに取り組み、正面から描写する。この試みは、明らかに郁達夫の後期の創作における新たな一歩である。一方、女学生同士の恋愛を描く際には、女学生同士の真の絆は精神的な繋がりにあることが示唆される。また、鄭秀岳と馮世芬の関係には陳応環という男性が潜み、男性に近い存在である李文卿といった男性のかげという要素が導入されていることは無視できない。こうした要素は、男性作家である郁達夫の創作上の限界で、つまり、女学生同士の恋愛を非常に理想化させているのではないだろうか。彼女たちの間は、肉体関係によるものではなく精神の恋愛に近いこと、もし仮に肉体関係があったとしても、それには必ず「男性」というイメージが混ざっていることである。女学生同士の恋愛の多様性までは示し切れてはいないと言えるだろう。

注

1）大東和重『郁達夫と大正文学 〈自己表現〉から〈自己実現〉の時代へ』（東京大学出版会、2012 年）は郁達夫の 1927 年以前の小説を初期に分類した。

2）郁達夫と左連の関係について、筆者は「1930 年の郁達夫：左翼作家連盟からの「除名」をめぐって」（『立命館文学』2022 年 9 月 679 号）において考察したことがある。

3）1927 年 4 月 12 日に中華民国において、北伐に呼応し第三次上海暴動を引き起こした武装労動者糾察隊が、国民革命軍右派による武装解除の命に応じず抵抗を試みたため、革命軍から武力行使を受けた事件およびその武力行使に対して抗議のためのデモを行った労動者・市民に対し革命軍が発砲・虐殺し、国民党左派・共産党系労動組合の解散を命じ総工会の建物を占拠した事件。「上海クーデター」と呼ばれる。

4）1932 年 1 月 28 日から 3 月 3 日にかけて戦われた中華民国の上海共同租界周辺で起きた日中両軍の衝突である。「第一次上海事変」とも呼ばれている。

5）『少女中国――書かれた女学生と書く女学生の百年』、岩波書店、2021 年。

6）この小説の出版状況について簡単に紹介しておく。

① 1932 年

3 月、『她是一個弱女子』が完成し、郁達夫は「あとがき」をつける。

4 月 20 日、単行本『她是一個弱女子』が上海湖風書局により出版される。2 ヶ月もたたないうちに、当局により「プロレタリア文芸」という名目で発禁され、書局も閉鎖された。

12 月、『她是一個弱女子』は上海現代書局によって再出版されたが、当局により即時発禁された。

② 1933 年

12 月、単行本『她是一個弱女子』は当局の命令で改稿させられ、題名も『饒了她』に変えて、上海現代書局より出版された。

③ 1934 年

12 月、単行本『她是一個弱女子』（後に『饒了她』）は当局により「政府を非難している」という罪名で 3 回目の発禁を受けた。

（1945 年 8 月 29 日夜、郁達夫は殺されている。）

④ 1982 年『郁達夫文集』（香港三聯書店＆花城出版社）の第二巻に収録。

⑤ 1992 年『郁達夫全集』（浙江文芸出版社）の第二巻に収録。

⑥ 2007 年『郁達夫全集』（浙江大学出版社）の第二巻に収録。

⑦ 2017 年『郁達夫手稿：她是一個弱女子』（中華書局）が出版された。（なお、本稿の引用は、これに依る。）

7）小説の大枠の構成は以下のようである。
全 27 節。
第一節：鄭秀岳、馮世芬、李文卿が登場。
第二節：鄭、馮の家族状況の紹介。
第三節：鄭と馮の友情が開花した。
第四節――第六節：演説大会の後、李は馮に腕時計や手紙を送った。
第七節：陳応環の手紙が登場。
第八節――第九節：馮は上海に行った。李は馮のベッドに入り込み鄭と一晩を過ごした。
第十節：鄭は戻ってきた馮の顔にキスした。
第十一節――第一三節：馮は陳と駆け落ちした。
第十四節：鄭と李の間に性関係が発生した。
第十五節：李の浮気によって、鄭と李が別れた。
（前半終了）
第十六節――第十七節：上海で、鄭は呉一粟と知り合った。
第十八節：上海クーデター。女工になった馮が負傷した。
第十九節：鄭は呉に恋愛感情が生じた。
第二十節――第二十二節：馮は糾察隊に属する陳の死体を見つけた。鄭と呉はお互いに告白し結婚した。約一年後呉が病気になった。
第二十三節――第二十四節：呉は病気のため失業して、鄭との関係は悪化した。鄭と馮が再会した。鄭は李文卿、李得中と張康（以前性関係があった教員）と文通を保っている。
第二十五節――第二十六節：呉は旅館で鄭と張康を見つけて、鄭の浮気を知った。
第二十七節：一・二八事変。鄭は日本軍に連れ去って暴行を加えた。最後鄭の死体は馮に発見された。

8）原文「秋漸漸的深了，鄭秀岳和馮世芬的交誼，也同園里的果実坂里的干草一様，追随着時季而到了成熟的黄金時代」。

9）原文「但両人在一道的時候，不問是在課堂上或在床上，不問有人看見没有看見，她們也只不過是互相看看，互相捏捏手，或互相摸摸而已。別的行為，確実想也不会想到的」。

10）原文「一口気跑到了東廂房里，看見了馮世芬的那一張清麗的笑臉，她一撲就撲到了馮世芬的懐里。両手緊緊抱住了馮世芬的身体，她什麽也不顧地便很悲切很傷心地哭了出来。起初是幽幽地，後来竟断断続続地放大了声音／馮世芬両手撫着她的頭，也一句話都不説，由她在那里哭泣，等她哭了有十分鐘的様子，胸中的郁憤大約総有点哭出了的時候，馮世芬才抱了她起来，扶她到床上去坐好，更拿出手帕来把臉上的眼涙揩了揩干浄。這時候鄭秀岳倒在涙眼之下微笑起来了，馮世芬才慢慢地問她説：／“怎麽了？有誰欺侮你了麽？”聴到了這一句，她的剛才止住的眼涙，又接連不断地落了下来，把頭一沖，重復又倒到了馮世芬的懐里。馮世芬又等了一忽，等她的声低了一点的時候，便又軽軽地慰撫她説：“不要再哭了，有什麽事情説出来。有誰欺侮了你不成？”／聴了這幾句柔和的慰撫話後，她才把頭挙了起来。将一双涙盈的眼睛注視着馮世芬的臉部，她只揺了揺頭，表示她併没有什麽，併没有誰欺侮她的意思。但一辺在她的心里，却起了絶大的後悔，後悔着剛才的那一種想頭的卑劣。“馮世芬究竟是馮世芬，李文卿哪里能比得上她万分之一呢？不該不該，真不応該，我馬上就回到校里把她的那個表那個戒指送還她去，我何以会下流到了這歩田地”」。

11）原文「突然間把自己的頭挨了過去，在馮世芬的臉上深深地深深地吻了半天。她和馮世芬両人交好了将近一年，同床隔被地睡了這些個日子，這挙動総算是第一次的最淫汚的行為，而她們両人心里却誰也不感到一点什麽別的刺激，只覚得這不過是一種不能以言語形容的最親愛的表示而已」。

12）原文「啐，這一対小東西倒好玩児」。

13）原文「当她們両人正挽了手同坐上車去的中間，門房間里，却還有一位二年級的金剛，長得又高又大的李文卿立在那里偷看她們。她的臉上，満洒着一層紅黒色的雀斑，面部之大，可以比得過平常的長得很魁梧的中年男子。她做校服的時候，裁縫店総要她出加倍的銭，因為尺寸太大，材料手工，都要加得多。説起話来，她那副又洪又亮的沙喉嚨，就似乎是徐千歳在唱《二進宮》。但她家里却很有銭，獅子鼻上架在那里的她那副金辺眼鏡，便是同班中有些破落小資産階級的女孩児的艶羨的目標。初進学校的時候，她的両手，各帯着三四個又粗又大的金戒指在那里的，後来被舎監説了，她才咕哝着“那有什麽，不帯就不帯好啦。”的泄気話従手上除了下来。她很用功，但所看的書，都是些《二度梅》，《十美図》之類的旧式小説。最新的也不過看到了鴛鴦蝴蝶式的什麽什麽姻縁。她有一件長処，就是在用銭的毫無吝惜，与対同学的広泛的結交」。

14）小説では既に李文卿と父が性的関係を保っていることを示している。

15）原文「她的対李文卿的熱愛，比対馮世芬的更来得激烈，因為馮世芬不過給了她些学問上的幇助和精神上的啓発，而李文卿却于金銭物質上的贈与之外，又領她入了一個肉体的現実的楽園」。

16）原文「她的計策尽了，精力也不継了，自怨自艾，到了失望消沉到極点的時候，才忽然又想起了馮世芬対她所講的話来：“肉体的美是不可靠的，要人格的美才能永久，才是偉大！”／她于無可奈何之中，就重新決定了改変方向，想以後将她的全部精神貫注到解放人類，改造社会的事業上去／可是這些空洞的理想，終于不是実際有血有肉的東西。第一她的肉体就不許她従此就走上了這条狭而且長的桟道。第二她的感情，她的後悔，她的怨憤，也終不肯従此就放過了那個本来就為全校所軽視，而她自己卒因為意志薄弱之故，終于闖入了她的陥阱的李文卿」。

17）鄭秀岳はまず李文卿の愛人である李得中（男性教員）と性交渉を持ち、次に文通相手の張康と性交渉を持つに到っている。

18）原文「世芬小同志／別来三載，通信也通了不少了，這一封信，大約使我在欧洲発的最後一封，因為三天之後，我将繞道西伯利亜，重返中国／你的去年年底発出的信，是在瑞士収到的。你的思想，果然進歩了，真不負我二年来通信啓発之労，等我返杭州後，当更為你介紹幾個朋友，好把你造成一個能負担改造社会的重任的人才。中国的目前最大的圧迫，是在各国帝国主義的侵略，封建余孽，軍閥集団，洋商買辦，都是帝国主義者的忠実代理人，他們再和内地的土豪，劣紳一勾結，那民衆自然没有翻身的日子了。可是民衆已在覚悟，大革命的開始，為其当在不遠。広州已在開始進行工作，我回杭州小住数日，亦将南下，去参加建設革命基礎。不過中国的軍閥是在根蒂深強，打倒一個，怕又要新生両個。現在党内正在対此事設法防止，因為革命軍閥是在比旧式軍閥還可怕万倍／我此行同伴友人很多，在墨西哥将停留一月，最遅于陽暦五月底可抵上海。請你好好用功，好好的保養身体。預備我来和你再見時，可以在你臉上看到両圏鮮紅的蘋果似的皮層／你的小舅舅陳応環二月末在柏林」。

19）原文「我同你説的話，都是他教我的呀，我不過没有把信給你看，没有把他的姓名籍貫告訴你知道，不過這些確是一点児関係也没有的私事，要説他做什麽，重要的、有意義的話，我差不多都同你説了」。

20）原文「秀岳，我的自五月以来的胸中的苦悶，你可知道？人虽則是有理智，但是也有感情的。我現在已経犯下了一宗決不為宗法社会所容的罪了，尤其是在封建思想最深、眼光最狭小的杭州。但是社会是前進的，恋愛是神聖的，我們有我們的主張，我們也要争我們的権利」。

21）原文「才同男子似的自言自語地咂了一咂舌説」。

22）原文「就同壮漢似地呵呵哈哈的放声大笑了幾声」。

23）原文「李文卿的臉朝了天，獅子鼻一掀一張，同男人似的呼吸出很大的鼾声，還在那里熟睡」。

24）原文「但董家世相的那一個朝天的獅子鼻，却和她母親玉林嫂的鷹嘴鼻調和了一下，因而婉珍的全面部，就化成了一個很平穏的中人之相，不引人特別的注意，也不討人的厭」。（注 6 の⑥に依る。）

25）原文「皮膚很白，鼻子也高得很，眼睛比尋常的人似乎要大一点，臉型是長方的。鄭秀岳看見了他伏出了半身在窓外天井里曬駱駝絨袍子，嘩叽夾衫之類的面型之後，心里倒忽然驚了，覚得這相貌是很熟很熟，又仔細尋思了一下，她就微微地笑起来了，原来他的面型五官，是和馮世芬的有許多共同之点的」。

26）原文「他的父母早故了，財産是没有的，到寧波的四中畢業為止，一切学費之類，都由他的一位叔父也系在某書館里当編輯的呉卓人負責的。現在呉卓人上山東去做女師校長去了，所以他只剰了一個人在上海。那《婦女雑志》本来是由呉卓人主編的，但他于中学畢業之後，因為無力再進大学，便由呉卓人的尽力，進了這某書館而作校対。過了両年，升了一級，就算作了小編輯而去幫助他的叔父，従事于編輯《婦女雑志》。而両年前他叔父去做校長去了，所以這《婦女雑志》現在名義上雖則仍説是呉卓人主編，但実際上則只有他在那里主持」。

27）原文「鄭秀岳聴到了呉卓人這名字，心里倒動了一動，因為這名字，是她和馮世芬要好的時候，常在雑志上看熟的名字。《婦女雑志》在她們学校里訂閲的人也是很多。聴到了這些，她心里倒後悔起来了。因為自従馮世芬走後，這一年多中間，她只在為情事而顛倒，書也少読了，雑志也不看了，所以対于中国文化界和婦女界的事情，她簡直什麽也不知道了。当她的父親在和呉一粟説話的中間，她静静児的注視着他那腼腆不敢擡頭的臉，心里倒也下了一個向上的決心。／“我以後就多読一点書吧！多識一点時務吧！有這様的同居者近在咫尺，這一個機会倒不可錯過，或者也許比進大学還強得多哩”」。

28）原文「当鄭秀岳和馮世芬要好的時候，她是尊重学文，尊重人格，尊重各種知識的。但是自従和李文卿認識以後，她又覚得李文卿的見解不錯，世界上最好最珍貴的就是金銭。現在換了環境，逃難到了上海，無端和這一位呉一粟相遇之後，她的心想又有点変動了，覚得馮世芬所説的話終究是不錯的。所以她于借報還報之余，又問他借了両卷過去一年間的《婦女雑志》去看」。

29）原文「馮世芬老了，清麗長方的臉上，細看起来，竟有了幾条極細的皺紋。她穿在那里的一件青細布的短衫，和一条黒布的夾褲，使她的年齢更要添十歳。／鄭秀岳起初在三等拖車里坐上的時候，竟没有注意到她。等降到日升楼前，両人都快下電車去的当児，馮世芬却従座位里立起，走到了就坐在門辺的鄭秀岳的身辺，将一只手按上了鄭秀岳的肩頭，馮世芬対她親親熱熱地叫了一声之後，鄭秀岳方才驚跳了起来。／両人下了電車，在先施公司的檐下立定，就各将各的近状報告個仔細」。

30）原文「鄭秀岳将過去的事情簡略説了一説，就告訴了她与呉一粟的近状，説他近来如何如何的虐待她，現在因為失業大眠的結果，天天晩上非喝酒不行，她現在出来就是為他来買酒的。末了便説了他們正在想尋一間便宜一点的亭子間搬家的事情，問馮世芬在滬東有没有適当的房子出租」。

31）原文「她想起了在学校里和馮世芬在一道的時節的情形，想起了馮世芬出走以後的她的感情的往事起伏，更想起了她対馮世芬的母親，実在太対不起了，自従馮世芬走後，除在那一年暑仮中只去了一両次外，以後就絶跡的没有去過。／想到了最後，她又转到了目下的自己的身上，呉一粟的近来対她的冷淡，対她的虐待，她越想越気，越想越覚得不能甘心。正想得将要流下眼淚来的時候，電車却的不得不下去的站頭上了」。

32）原文「馮世芬她舅舅的性格，是始終不会改変的。現在她雖則不会告訴我他的近状怎様，但推想起来，他的対她，総一定還是和当初 一様。可是一粟，你呢？你何以近来会変得這様的呢？経済的圧迫，我是不怕的，但你当初対我那様熱烈的愛，現在終于冷淡到了如此，這却真真使我傷心」。

33）原文「呉先生，你的失業，原也是一件恨事，可是你対鄭秀岳為什麼要這様的虐待呢？同居了好幾年，難道她的性情你還不暁得麼？她是一刻也少不得一個旁人的慰撫熱愛的。你待她這様的冷淡，教她那一顆狂熱的心，去付託何人呢」。

34）原文「饒了她！饒了她！她是一個弱女子」。

35）原文「在五六個都是一様的赤身露体，血肉淋滴的青年婦女屍体之中，那女工却認出了双目和嘴，都還張着，下体青腫得特別厲害，胸前的一只右奶已被割去了的鄭秀岳的屍身。／她于尋出了這因被輪奸而斃命的旧同学之後，就很有経験似地叫同志們在那里守着而自己馬上便出去弄了一口薄薄的棺材来為她収殓。／把她自己身上穿在那里的棉襖棉褲上的青布罩衫褲脱了下来，親自替那精赤的屍体穿得好好，和幾位同志，把屍身擡入了棺中，正要把那薄薄的棺蓋釘上去的時候，她却又跑上了那屍体的頭辺，親親熱熱地叫了幾声説：“鄭秀岳！……鄭秀岳……你総算也照你的様子，貫徹了你那軟弱的一生。”又注目呆看了一忽，她的清秀長方意志堅決的臉上，却也有両滴眼淚流下来了。／馮世芬的収殓被惨殺的遺体，計算起来，五年之中，這却是她的第二次的経験」。

36）旅館で張康が鄭秀岳を殴る時、日本軍が鄭秀岳を連れ去る時、避難所にいた時、呉一粟は三回でこの言葉を話した。

（本学大学院博士後期課程）